

# 時の聖なるもの

## ——黒住真先生を送ることば——

村田雄二郎

黒住さんはいつでも多くの学生に囲まれている。なかに外国からの留学生も少なくない。すでに駒場での修行を終え、内外の学術界で活躍している門下生も多数知っている。まさに「桃李満天下」である。学生に対する親身で暖かい態度は、すでに周知のことだから、多言するまでもないだろう。近世日本思想家としての学問的業績となれば、まずは2冊の重厚な主著（『近世日本社会と儒教』『複数性の日本思想』）を紹介すべきところであるが、あいにく当方にその力はまったくくない。したがって、流れはおのずと昔ばなしになる。

その一。黒住さんが専攻の管理運営業務に忙殺されたあげく、体調を崩して緊急入院となり、しばらく休養されたときのこと。お見舞いにかがった黒住さんは、じつに泰然自若としておられた。一時は幽明の境に立つほど深刻な状況にあったとのこと。日頃、たましいをこめて「いのち」という表現を使われる黒住さんだが、このとき耳にしたそのことばほど重みをもつものはなかった。不安定な病状がつづくなか、それでも黒住さんとの短い会話から、おのれの生をまっとうしようという強い意志のようなものが、鈍感なほくにも感得された。「村田さんも気をつけた方がいいよ。」その落ち着きぶりからも、「悠然として南山を見る」の「悠然」とはかくのごときものか、とも思った。漢字ではなくひらがなの「いのち」。この日の黒住さんは、ほくにとって最良の倫理学の教師であった。

その二。黒住さんに誘われて中国某都市の学会に参加したときのこと。駒場から参加した院生の報告をめぐり、ちょっとした波乱があって、昼食の際にその話題が出た。後から思うと赤面の至りなのだが、事情を知らない僕は、黒住さんにずいぶん失礼なことを口走ってしまった。そういうときの黒住さんは、少し困ったような顔をして、やや口ごもりながら、やんわりと正論を述べられた。それは、口論を起こしたいずれの側も非難するのではなく、人徳ユーモアの力でその場のこわばった空気を場面転換させる類のことばだった。（精確に何といわれたかは思っていないが、内容自体はどうでもいいことだ。）この日の黒住さんは、ほくにとって最良の人文ヒューマニティズ学の教師であった。

その三。なにかの懇親会の席であったか、酒食をともにしての雑談の場でのこと。黒住姓の話になり、「ほくはその名のつく教派とはなんのかかわりもなく、カソリックの

ほうで……」と語られた。ふだんあまり自分のことは揚言されない黒住さんだから、やや唐突に出てきたそのことばは、わりと鮮明に記憶にのこっている。ご家庭はプロテスタントで、母堂の実家が日蓮宗不受不施派だったという。（「新井奥邃から目覚めさせられるもの」『新井奥邃著作集』別巻・月報、2006年7月。）このときはそれ以上信仰談義がひろがることはなかったが、それまでなんとか学生指導の場で、いつも「甘め」の黒住さんが、ときに真綿に針を包むが如く、的確で厳しい指摘をつきつけることがあったことに思い及んだ。自他を律する姿勢の厳しさは、学問修練の場でもけっして例外ではなかったわけだ。多くの人をひきつける「黒住思想史」は、おそらくそうした垂直的な自己規律の太い背骨で組み立てられているのであろう。この日の黒住さんは、ほくにとつてひたすら信仰の人であった。

以上、物言わずして人を感化する。ひと言で人を教化する。やはり黒住さんは「聖人、学んで至るべし」の人である。

(2015年12月31日深夜)